

# 道 どうひょう 標

*d o h y o*

年間特集 「おてら」

第三回・不急のこととは ネルケ 無方さん

連載

あなたのいのちの物語 死を前にした自由と安らぎ

伝承を科学する 能のワキ僧の資質とは？

道しるべ 無住処涅槃

2021 夏季号







## 年間特集

「おてら」  
第三回  
ネルケ無方

## 「不急のこととは」

人はパンだけで生きるものではない！

小学生のころから、私は宿題をするのが大嫌いだ。学校へ行くのも億劫でしかなかった。一年生のころ、母をガンで亡くしてしまったということも関係していたのだろう。そのころから、仕事から帰宅した父親をよく質問攻めで困らせていた。

「お父さん、人間はどうせ死ぬのに、なぜ宿題をしなければならぬの」「宿題をしないと、上の学校には進めないよ」

「上の学校にはなぜ進まなければならぬの?」

「だって、上の学校を出なければ、仕事もできないよ」と父親は即座

に答えた。しかし、毎朝通勤している父親の後姿はけっして嬉しそうには見えなかった。

「お父さん、どうして仕事をしなければならぬの?」

「それは君を養うために決まっているじゃないか」

「でも、お母さんも死に、僕やお父さんもやがて死ぬだろう。なのに、なぜ!」

それにはさすがに父親も答えられず、「学校の先生に聞いてみなさい」と逃げてしまった。ところが、学校の先生も「それは上の学校に進んでからでないと、教えられないよ」とうそぶいていた。どうやら大人たちも何も分かっていないらしい… 生意気

な私はそれを悟ってしまった。

「人はパンだけで生きるものではない」「新約聖書に出てくる、イエスの言葉に私は幼いころから惹かれていた。生活がすべてではない。それ以前に△なぜ生まれてきたのか▽△なぜ生きるのか▽私はそれを知りたかった。

「神の口から出る二つの言葉で生きる」(マタイによる福音書4:4)とイエスの言葉は続く。しかし、キリスト教の説教も疑い深い私などには素直に信じられるはずもなかった。牧師さんの口からは聖書の言葉は次々と出るが、「神は本当にいるのだろうか?」「神がいるなら、どこにいるのだろうか?」と。

## 自分の人生を俯瞰したかった

私が高校生になったころ、欧米でZENがブームになり私も坐禅に誘われた。断り切れずはじめた禅にはまってしまった私は、次第に仏教の本ばかりを読むようになった。特に両親の期待に反して、国王になりたくないと言いつつお釈迦さまの話に

私は深く同感した。どんなに豊かな生活であったとしても、それだけでは生きる意味が分からないのではないかと大人たちの「社会ゲームに付き合うより、坐禅を通して自分の人生をもっと高い視点から見渡したかった。お釈迦さまの出家にあこがれ、私は大学で日本語を学習し、卒業後には兵庫県の但馬地方にある安泰寺という曹洞宗の修行寺で出家得度をした。人里を離れた山奥で田畑を耕し、自給自足の生活を営みながら年間一八〇〇時間の坐禅に打ち込んだ。「坐禅して何になるか」と師匠に聞けば、「何にもならん!」と一喝された。かえって



なぜ生まれてきたのか、なぜ生きるのか、

私はそれを知りたかった。



ここにこそ禅の神髄があるのだと確信した。

その後、三三歳の若さで師匠の跡を継いで住職となり、二〇二〇年まで修行僧たちの指導に当たった。「坐禅の意味は？」と問われれば、「ゲームを二服する(いったん社会ゲームを降りる)ことだ」と答えた。「二服した後は？」と問われれば、「再びゲームに参加し、もつとフェアなプレイをするのだ」と答えた。ゲームの目的は勝ち負けではなく、皆が楽しく遊べるためにあるのだ、と。



## 子供のようない好奇心、青春のようないハングリィさ、そして軌道に乗れない愚かさ

### 仏の教えは不要不急？

そして社会の中で多くの方々と共に仏の教えを学ぶつもりで、私は十八年間務めた住職を引退して山を下りた。そのあと大阪を中心に、日本国内で講演会や坐禅会を開くつもりだったが、その計画は見事に台無しにされた。それまで頻繁に届いた講演会や法話へのお誘いはもちろんのこゝと、例年頼まれていたお盆の手伝いまでとことん中止になってしまった。大阪で欠かすことなく続けたことと言えば、毎週日曜日の坐禅会と勉強会くらいである。それも緊急事態宣言の内はオンラインのみ。本音をいえば、仏の教えは△不要不急▽であるはずはない。「生活よりも大事なものは何か！と私は思うのだが、今ではリアルで聞く機会はさっぱり減ってしまったのである。

しかし私の都合などまったく通用しないことこそ、「仏」ではないだろうか！そのため、私は最近「コロナ仏」という言葉を使い始めた。世間の目から見れば「禍」でしかないパンデミックのせいで、多くの人が将来に対する不安を抱えているということは確かである。その不安をなおざりにするつもりはない。しかし、見方を変えれば一見順調に回っているように見える世界経済というハムスター車に、コロナ仏がいっぺんに砂を投げ込んでくれたと言うことはできないだろうか。

あると言えよう。いまこそ、世界規模で自分の生き方を見つめ直し、自らを支配していたポイント稼ぎゲームを見直す時期が来たのかもしれない。いくら叫んでも崩れなかった利益追求主義。それがいかにも簡単に瓦解していく：

「世人、薄俗にして共に不急の事を諍う」という言葉が『大無量寿経』という仏教のお経に載っている。コロナ仏のおかげで世の中のあらゆる活動が実は不要不急なのだバレて、今まで「急だ、急だ」と背中を押してきたそいつは一体、誰だったのか？…と考

これから新しいパラダイム(規範)を創造できる、興味深い社会になるような気がする。そのために必要なのは、子供のようない好奇心、青春のようないハングリィさ、それと敷かれたレールに盲目に乗らない勇気や社会の狭い枠にハマらない愚直さではないだろうか？

「世人、薄俗にして共に不急の事を諍う」という言葉が『大無量寿経』という仏教のお経に載っている。コロナ仏のおかげで世の中のあらゆる活動が実は不要不急なのだバレて、今まで「急だ、急だ」と背中を押してきたそいつは一体、誰だったのか？…と考

あとは念仏や坐禅のような安住できる所があれば、不安が無条件の希望に代わるはずである。

### ネルケ無方(ねるけ・むほう)

1968年、ドイツ生まれ。幼い頃に母と死別、人生に悩む。16才で坐禅と出会い、1990年に留学生として初来日。1993年に曹洞宗・安泰寺で出家し、2002年から2020年まで安泰寺の住職に。国内外の坐禅指導の傍ら講演活動を行っている。著書『迷える者の禅修行』など多数。







# 伝承を

## 科学

する

### 能のワキ僧の資質とは？

能という演劇では、主役のことをシテ（仕手、為手）と呼ぶ。代表的な作品のシテには、平家物語の武將の幽霊、源氏物語の女性の幽霊、善悪を超越した神、鬼、天狗などがあるが、シテは最初からは登場せず、きっかけに導かれて登場することが多い。きっかけを作り出す役目が、ワキ（脇）と呼ばれる役である。

多くの作品で、ワキは僧侶（ワキ僧と呼ばれる）に扮する。ワキ僧は、最初に登場し、名乗り、旅に出発する。旅の途上、名所などにしばし佇んでいると、そこに住む土地の人（シテ）が現れる。風景をめで、作業をし、祈りを上げるシテに、ワキ僧は声をかけて、言葉をかかわす。やがてシテは、土地に所縁のある物



（融）（シテ：浦田保親）

(c) yasuchika Urata

ワキ僧の前に現れる、田子をかたげた汐汲みの老人（シテ）

語を語った後、その素性をほのめかして消失する。

しばしばシテは、ワキ僧に、自らの供養を頼む。その望みに応じて、ワキ僧は念仏や読経を始める。声に導かれ、ワキ僧の前（あるいは夢の中）に、幽霊（シテ）が生前の中身の姿で現れる。ワキ僧への感謝を述べつつ、生前のクライマックスとなる出来事や思いを、語り、歌い、舞ってみせる。その姿はやがて消滅し、最後にワキ僧の前に現実の風景だけが残る。

作品によって違いがあるものの、大雑把に捉えると、ワキ僧の役割は右のとおり、「旅をする」「土地の人の物語を引き出す」「供養をおこなう」「夢や幻を見る」という四つに整理できる。

世阿弥作の〈融〉を紹介しよう。

東国出身の僧侶が京都をめざし、六条河原の院にたどり着く。そこに、汐汲みの田子をかたげた老人が現れる。老人は月あかりの下で、作業の辛さや老いへの嘆きを、秋の夜寒にならずらえながら歌う。ワキ

僧が声をかける。「こんな内陸でなぜ、海で行う汐汲み作業をするのですか」。能楽師の安田登氏によると、ワキは「スイッチを踏む」役、つまり質問によってシテを挑発し、場面を前へと進める役である。シテは答える。「何を言うのだ。ここを何処だと心得るか」。

ワキ僧はまた、シテが「よくぞ聞いてくれました！」と答えたくなるような質問も発する。シテはすっかり乗せられて、この土地が、陸奥の塩釜の風景をうつした壮大な庭園であったこと、しかし今はすっかり廃墟となってしまったことを語り、昔を懐かしむ。ワキ僧はさらに、シテがこの土地から見渡せる名所歌枕を教えたがっていることを鋭く察知。シテの名所教えに付き合う。

〈融〉では後半、光源氏のモデルと言われる実在の人物、源融の幽霊が登場する。登場のあとワキ僧は、シテによる物語、歌、舞をずっと見守っている。月も傾いて明け方となった。幽霊は、ワキ僧の夢の中の幻だったのだ。

こうしてみると、ワキ僧の役割は、カウンセラーの役割に似ている。良いカウンセラーの前で、人は様々な物語を始める。良くなければ始めもしない。ワキ僧の聞き方が良ければ、土地の人は様々な物語を始めるだろう。さらに、幽霊になって現れたくもなるのだろうか。幽霊が誰の前にも出ると思ったら大間違いだ。能の作品の中の幽霊の出現は、優れたワキ僧が稀に出会うことのできた時空間、いわばカウンセリングの成功事例のようなものである。

#### 藤田隆則（ふじた・たかのり）

1961年山口県生まれ。大阪大学卒業。博士（文学）。京都大学助手、大阪国際大学助教授、ミシガン大学招聘教授をへて、現在、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。専攻は、民族音楽学。主な研究対象は、日本の能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能の多人数合唱』『能の地拍子研究文献目録』『日本の伝統音楽を伝える価値―教育現場と日本音楽』『能のノリと地拍子―リズムの民族音楽学』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えていくための応用的研究に従事。



無住処涅槃

街角の地藏菩薩がなぜ錫杖を持つ僧形かを問う人は少ないと思う。お地藏さんはもとお坊さんだと思込んでいるようだ。ところが、曼陀羅では有髪の菩薩として描かれている。さて、どこで僧形になられたか定かには知らない。

ただ、地藏菩薩はたまたま出家僧の姿でなく、深い意味が込められている。現代、我々が目にする僧形の地藏菩薩は「声聞」の姿といわれている。この言葉は仏陀の説法を聞いて覚る者という意味で、釈尊の直弟子への讃辞であった。

ところが、仏教が展開してゆく中、大乘仏教が力を持つと、他者の利益を重んずる「菩薩」の自利利他の実践が尊ばれた。それに対して「声聞」と「縁覚」は、自身の覚りにこだわり、他者を顧みない者として、利他の心を欠く故に、永遠に成仏できない者と確定され、貶称とされてしまった。しかし、地藏菩薩はその言葉を逆

手にとつて、究極の大悲の姿として現れたのである。

あまり聞かない仏教用語に「大悲闡提」という言葉がある。もとは「イツチャンチカ」といい、「二闡提」と漢文表記され、「断善根」と意識されて、宗教的意識が全く欠落した者をあらわす言葉とされている。したがって、絶対に仏に成れない者といわれてきた。この強烈な言葉を用いて、慈悲の深さをあらわそうとしたのである。

世界中に一人でも迷い苦しむ者が居る限り、自分は先に仏に成らない。最後の一人まで共に歩み続けるといっているのである。大悲実現の為に「闡提」でありつづける。

しかも、苦を共にするだけでなく、「智慧あるが故に生死に住せず、慈悲あるが故に涅槃に住せず」といわれるように、平等の智慧を成じて、苦者を導きつづける。これを「無住処涅槃」と呼んでいる。

編集後記

誰しも思いもしなかったコロナパンデミック。あつという間に世界に拡散、長期化してしまつた。それは次第に社会をそして人の心までも変えていく。現に誰も看取られないで死んでいき、そして制限された人数で見送つていく、それが現実になつてしまつた。長年我々が培つてきた別れの形式と共に心までもが持ち去られていくような気がする。長年その風土に立脚してきた寺院の行先は不透明である。ネルケ師のいう「コロナ仏」という言葉はいささか衝撃的である。師は若い時、「座禅で人生を俯瞰したかった」その心で日本での出家修行。高い見地からの希望のお言葉と味わいたい。

合掌

表紙の絵 聖徳太子

今年に聖徳太子の二四〇〇年忌にあたり、太子ゆかりの寺院では法要を行っている。太子信仰を一般化したのは浄土真宗である。親鸞聖人は「和国の教主」と仰ぎ、真宗寺院には七高僧と共に「聖徳太子孝養図（十六才）」がまつられている。何故聖徳太子を親鸞聖人が大切にされたのか。それは太子が仏教徒の「規範」を示してくださつたからに他ならない。十七条憲法をつくり、仏教の宗教的な道理を大切にしている。第一条では和を大切にすること、人といさかいをしないようにすること。第二条では仏教を敬う生活をする事、国家があるべき姿だけでなく、全ての人が遵守すべき平和、平等そして慈悲の心による。太子は「法華経」「維摩経」「勝鬘経」を講義されたが、「維摩経」は在俗信者の維摩が仏弟子を啓発する経典であり、自身と重ね合わせ、「勝鬘経」を推古天皇に三日間講じたのは勝鬘夫人が女性であり、太子が推古天皇の摂政であつたからと推察出来る。「勝鬘経」には捨身、身を捨てよ、と説かれている。法隆寺の玉虫厨子の右側面には「捨身飼虎図」、左側面には「施身聞偈図」が密陀絵（油絵）で描かれている。

畠中光亨（はたなか こうきょう）

日本画家 / インド美術研究家  
真宗大谷派僧侶

天岸浄圓 (あまぎしじょうえん)

1949年(昭和24年)生まれ。本願寺派布教使。

行信教校講師、大阪教区東住吉組西光寺住職。

仏壇仏具のことは お気軽に お問い合わせ下さい  
株式会社 廣瀬佛壇店  
0120-81-7065 06-6771-7007  
タウンページ http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/ (詳細地図有り)  
〒543-0062 大阪市天王寺区逢坂2丁目1-12 (四天王寺西門交差点 西へ30m)